

# 青春 私の母校 スクール

せいけい 成蹊中学・高校③ (東京都武蔵野市)

## 「出る杭」が医療界を変える



「連続した他流試合をさせる米国の人材育成システムでは、とてつもなくできる連中が育っている」と黒川清さん

だが時代は異端を求めていた。83年に東大に請われて戻った。医学部の教育は量も質も米国に劣っていた。米国式の臨床講義を実施し、改革に着手し、若手を励ました。

政策研究大学院大学名誉教授の黒川清さん(80、1955年卒)は、代々医者の家系に生まれ東京大学医学部に進んだ。「医者になるのは当然だと思っていた。定まった道を歩んでいたが、米国留学が転機となった。

東大教授から東海大学医学部長に。医学部を改革してくれという要請だった。大病院の院長に就職する既定路線はどうしても性に合わないと思っていた時の晴天の霹靂で、とてつもなくうれしかった。

当時から米国の医学研究は質が高く、自立を求められた。教授になるまで何度も大学を移る「他流試合」の連続。同じ大学OBで固まり、ポストが与えられる日本とは違う刺激的な世界だった。

その後、東京電力福島第一原発事故の国会事故調査委員会の委員長を務め、日本のリーダーたちのふがいなさを知り、そのまま世界に向けて発信した。それが世界に対する日本の責任と考えたからだ。今では若者たちに期待をかけ、「出る杭になれ」と励ます日々だ。

通常は2、3年で帰国するの14年間滞在。3大学を渡り歩き、UCLA内科教授となった。「東大は破門だと思っただね。長く居つくのは掟破りだったからね」

「成蹊の教育は俳人の中村草田男さんが国語を教えるなど個性豊かで粹



「病院にしる会社にしろ社会的責任を果たし、社会的役割を追求することが必要」と河北博文さん

にはまっていなかった。他で教育を受けていたらこんなへそ曲がりにはならなかったと黒川さん。

河北総合病院(東京都杉並区)理事長の河北博文さん(67、69年卒)も医療界の改革者。河北さんは95年、病院が提供する医療サービスを第三者が評価する日本医療機能評価機構を設立した。

設立に向けて動き始めたのは82年。慶応大学医学部卒業後、米シカゴ大学大学院のビジネススクールに留学し、帰国したころ。シカゴ大は世界で最初に病院経営の講座を設置。シカゴには病院の機能を評価する団体の本部もあった。留学で患者のために医療がよくなるには評価制度がなくてはならないと確信した。

河北さんの動きに対して、医療界からの反発は強かった。「評価されたくない、批判されたくないと思うのは人の習性です」。医療関係者の抵抗は分かっていたが、患者のためには評価制度は必要だった。来年からは評価が法的に義務づけられる。構想から35年。少しずつ理解者を増やした結果だった。

高校時代に生徒会長を務めた。「制度改革に取り組むにしろ、常に筋を通した」。学生時代の流儀が今も貫かれている。

(安井孝之)